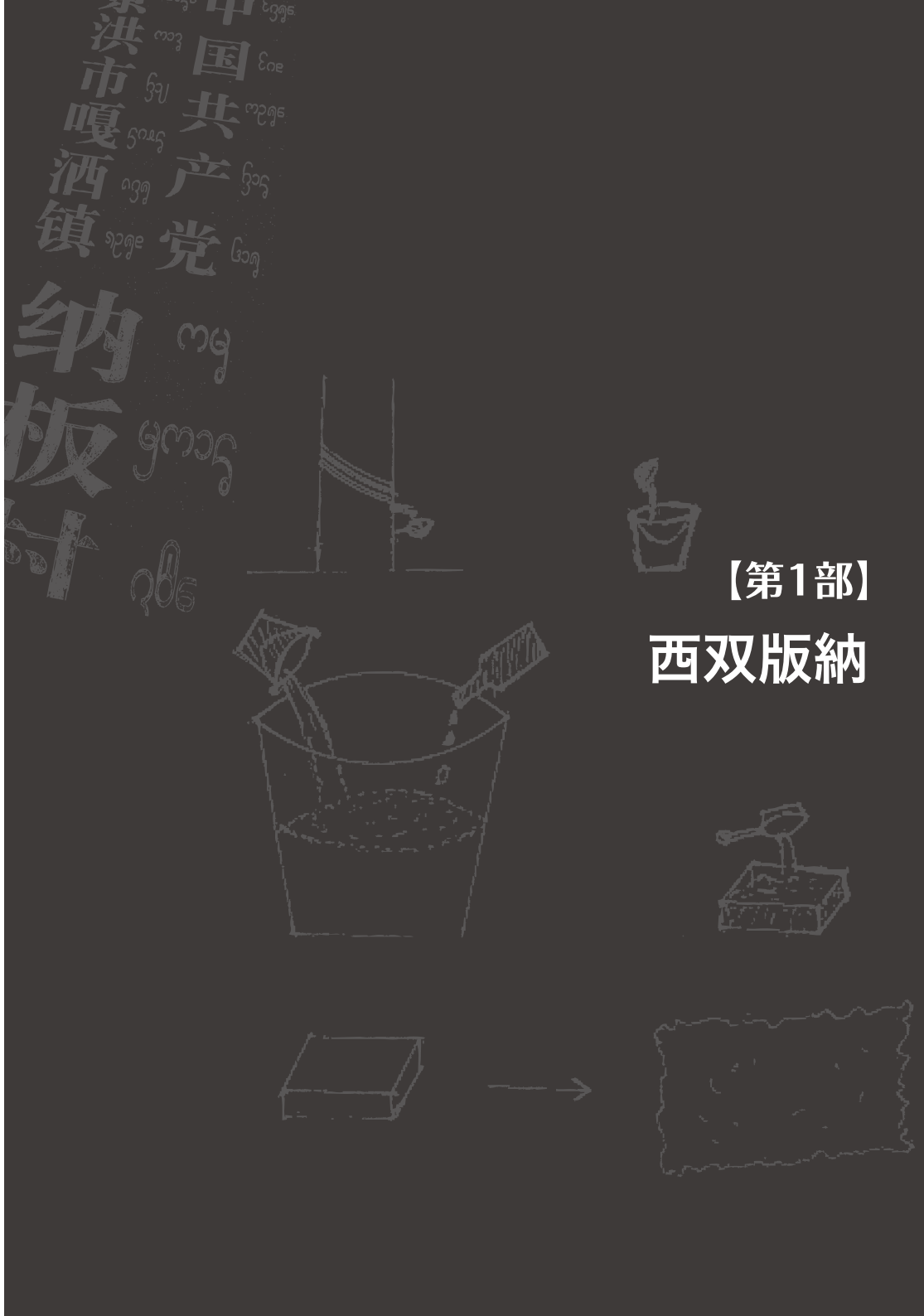
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	納板保護区における人々の生活の変化について : 観察・聞き取りからの一考察
Author(s)	西, かおり
Citation	GLOCOLブックレット. 2013, 11, p. 17-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48333
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka



【第1部】

西双版納

納板保護区における人々の生活の変化について
観察・聞き取りからの一考察

西 かおり 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

はじめに

冒頭『西双版納について』で既述されているように、私たちは1992年に指定された納板保護区において調査を行った。納板保護区では、保護員を中心として保護とは何であるか模索しつつ、現地の人々のくらしを尊重しながら、自然保護活動をおこなってきたところである。

この章では、納板保護区の人々の生活の変化について着目し、近年の納板保護区の人々の暮らしぶりの一部を記述するともに、自然保護の持続可能性について検討しようと思う。今回は、この納板保護区にある村33のうち、3つの村を事例として取り上げる。

まず、ひとつめの村である納板は、標高690メートルに位置し、保護区の中では最も麓に近い村であり、傣族を中心とした43世帯188人が暮らしている。この村のほとんどの家庭では、個人が所有する土地でゴム栽培がおこなわれている。

次に紹介する村、曼兴良は今回の調査地では一番標高の高い1800mに位置し、ラフ族が53世帯217人が暮らしている。

最後の村は、曼呂村で、ブラン族のサブグループである克木人（クム人）[1]が22世帯102人暮らしている。もともとは異なる場所に住んでいたが、国の少数民族政策により、今の場所へ移され、安定した住居を設けられるなどの援助を受けて定住している。

この3つの村の共通点は、1950年代までは農業や狩猟など、その土地に適した生業で自給自足的な生活であった。しかし、そ

1　中国では民族名には「族」を使い、まだひとつの民族として認められていないグループに対しては「人」を使っている。

の後、外部からゴム農園が入ってくるなど、外部からの影響を受け、それぞれの標高で栽培可能な作物が工業的生産の生業へと移り変わり、現在では、生業の変化とともに生活も著しく変化している。

それでは、村ごとの状況を具体的に紹介する。

各村の状況

①8月6日　納板（インタビュイー：傣族Ａさん44歳）

ここは、ゴム産業中心のライフスタイルに変化した、傣族が人口の大半が占める村である。ゴム産業が始まったのは1986年からで、当時政府が熱帯農作物のバナナやゴムを産業として、この地域で奨励し、推進を始めた。しかし、当初はあまり生産量がよくなかったため、人々の産業の中心は依然として農業（米）が占めていた。しかし、2005年頃になると、急速にゴムの生産量が伸び、次第に産業もゴム中心へと移っていった。そして、現在では、農地として使っていた畑は、バナナ生産を目的とした広西チワン族自治区へ全て貸し出し、自分たちはゴム産業で生計を立てるようになった。今の生活について聞いたところ、村長は「生活は以前よりもとても便利に、よくなった。」と答え、以前の生活からの変化について色々と話してくれた。

食べ物は、以前は油がなく、自分たちでとってきた山菜を中心の食事が多かった。また魚を川でとってきて食べることもあった。しかし、お腹がすぐすいてしまうので大変不憫であった。それに比べると、今は油が手に入り、山菜や魚中心ではなく、野菜や肉も手に入るようになったので、食も大変おいしくなり、よくなった。しかし、彼らの食べ物のほとんどは、市場や外から売りに来る人たちから購入しており、自給自足的な生活からは大きく変化し、貨幣を中心とした市場のやりとりがみられた。

交通については、以前は自転車で行動するので、山道が多く、遠くまで行くには大変不便であった。しかし、今はバイクや自動車があるので（家の車庫には立派な日本社の自動車がおいてあった）、便利になった。この自動車は1年前に購入したもので、我が家はこれだけ豊かな生活（金銭的余裕がある）である、といった「生活の豊さの象徴」のように感じられた。実際に、この自動車を実用的に頻繁に利用しているわけでなく、ただ家に置いてあるようなようすであった。村長は、「周りの人々がゴム生産で得たお金で車を購入しているので、村長なのに、持っていないのは恥ずかしい」と言っており、その自動車を実用的に必要とするかどうかではなく、村長として周りからどう見られているのか気にしており、その見栄が少し感じられた。

家は、伝統的な竹でつくられたものではなく、村長の家は、煉瓦造りの家であった。話によると、最近はそれよりも発展したコンクリートの家が徐々に出来ているようで、家も近代的なものに変わっているようであった。

また、以前は農業が中心だったために、朝～夕方にかけて働いていたが、現在はゴム産業が生活の中心であるので、夜中～朝方にかけて働く夜型の生活に変化していた。それは、夜は風が少ないのでいいということと、朝は温度が低いためにゴムの樹液がよく流れるのでこのような夜に働くのがよいということであった。しかし、そのために家族との生活スタイルが異なり、一緒に家にいる時間が少なくなったそうだ。

このように、生活の物質的側面での変化だけでなく、ライフスタイルもゴム産業によって大きく変化していた。

またインタビューした家では、ゴムを加工する作業も敷地内で行われていた。この作業について、加工過程で化学薬品を使用していた。しかし、その使用による水の汚染などの環境に与える影響について、関心はほとんどないようであった。作業工程、使用する薬品は技術員に教えられたとおりにやっているだけで、「私たちはよくわからない」と答えた（ゴム加工による汚染については、本書の朱倩沁の報告を参照）。

写真1：車庫に保管されている車

森林保護に関しては、水源の森は保護するように法律でもきめられているし、自分たち自身でも保護をするべきだと考えていた。

なぜなら、川の水は、彼らにとって重要な資源であるからだ。川の魚をとって食べ、川沿いの植物も食材として利用し、田んぼへの利用など、水は自分たちの生活を支えているものである。そのため、水を保護する重要性は、自分たち自身も感じているようであった。しかし、以前に比

べると、川から魚をとって食べる機会が減ったため、川や水源を守ることと自分たちの生活との関係性に希薄さを感じた。また彼らは近年、生活用水は井戸水を利用している。川の水を直接利用していないことも、その関係性の希薄さの要因のひとつとして考えられる。

②8月7日　曼兴良（インタビュイー：ラフ族Bさん30歳）

この村では地理的条件より、標高も高いことから、茶栽培に適しており、茶の生産を中心に生計を立てていた。以前は自家消費用のみに茶をつくっていたが、今は、商業用が主目的になっている。原料として商社に販売することがあるが、利益を上げるため自分で加工し、販売ルートも自分で開拓しようと考える人も現われている。また出稼ぎに行く人もおり、村から2～3人が出稼ぎに出ていた。

家は以前、草や植物を使った家であったが、現在は道路が整備され建築資材が運搬できるようになったために、煉瓦造りの家が普及している。その結果、安全性は上がり、夏は涼しいが、冬は寒いので、アンペという道具を使って火をこまめにたいて寒さをしのぐ。また数年前に電気が入ったので、夜でも真っ暗ではなくなった。

服は夏も冬も一年中同じ一着で過ごす。以前は自分で作っていたが、今は近くの行政村で買っている。2008年には政府の援助で村全体に太陽光発電パネルが導入され、温水がひけるようになった。その結果、以前よりも生活は便利になったと感じているようだが、台所は伝統的ないろりを利用しており、まだまだ伝統的生活に即した生活のようすもみられた。

近年、この村では水源保全のために、集体林＝コモンズとして森を伐採しないことを村のルールとし、乱開発も禁止している。その伐採の禁止理由として、山の上での水が少ない、水を保存するための木がないと我々は生きていけないというように認識していた。現在は、公有地制度とみんなの理解と協力のおかげで森の状態はよくなった。しかし、以前は規制もなかったために、焼畑をし、火をコントロール出来ず、山全体がやけてしまうこともしばしばだったようだ。

一方、この村では、近年ゴミが増えており、今まではゴミのほとんどが生ゴミであったため、豚のえさとして利用していたが、現在では、豚のえさとして利用できないゴミの処分に困っているようであった。村にはプラスチック製の袋やゴム草履などがゴミとして道に捨てられていた。

ここは、山の頂上に近い地域であったため、外からの影響はほかの山腹部に比べると少ないと感じた。例えば、村の人たちは自分たちの言語を使って生活し、外部の人間である私たちに対しても大変恥ずかしがって、物陰に隠れたり、少し離れたところから緊張してこちらを見るようすである。しかし、一方で道路が整備され交通が便利になったことから、物の流れは以前より多くなっており、その結果がほかの村へ買い物に行くことが可能になり、商業用としての茶栽培が普及し現金収入を得る機会が増えている。数年後にはさらに外部との接触が増え、彼らの生活にもまた変化がみられるのは確かであろう。

③8月8日　曼呂村（インタビュイー：クム人[1]Cさん）

この村に入ると、青い屋根の近代的な家屋の並びが目に入る。これは、政府によって立て替えられたものである。クム人の貧しい暮らしをよくしようという目的で、政府による扶助が2008年から始められ、その時にこの村の家々は一斉に建て替えられた。昔の伝統的な草を利用せず、安全性を重視したものとして、煉瓦やコンクリートは今までクム人が使用したことない建築材であった。村長は、「家」に対して、昔のような草の家は「恥ずかしい」と言っており、今の近代的な家屋に満足しているように感じられた。ここでも、家（住環境）はこの村長にとって重要な地位を占めており、それはひとつには自分の立場を主張する象徴的なものであると捉えられる。また「伝統的草の家は恥ずかしい」というのは、近代的ではなく遅れていると感じられる。物質的な側面でみると、村長は、伝統的なものを尊重するよりも、近代のものを発展的、先進的であって、よりよいものと考えているようだ。ただこの観点については、もう少し彼らの生活を観察し、彼らにとって近代的なものに対する考えを考察する必要があるだろう。

住宅支援を受けたとき、村長はこの支援について、「外の世界のことだから、よくわからない。私たちのような民族（ラフ族・ブラン族・クム人）はとても貧しく、特に私たちクムの人々は最も貧しいから、政府は助けてくれたのではないかなあ。」と話してくれた。村長は、政府を「外の世界」と捉え、自分たちの世界とは別々

のものとしてみているようだった。その自分たちの世界とは、今まで培ってきた伝統や文化、ここでは民族の特有な言語（クム語）や農業（米・トウモロコシ）や狩猟などの生業といった生活背景のある世界をさしているのではなかろうか。住宅支援の他にも、このクム人の世界にも少しずつ外からの影響を受けて変化していることがわかる。例えば、生業に関していうと、現在は動物がいなくなったため、狩猟はやめた。そして、政府が推進したパイナップルを育て、1987年からは農業からゴム産業へ移っている。またこの村ではゴム産業による収入では不十分とし、ゴム産業以外に副業として薬草植物を栽培し、これを売ることで現金収入を得ている家庭もみられた。

このように現金収入を得る機会が増えたことで、人々の家にはTVや冷蔵庫などの電化製品や、車・バイクといった利便的なものが普及していた。もう一軒見学させていただいた家庭では、ゴム産業によって得た収入より、TV・冷蔵庫・バイクを所有していた。話をしてくれた女性（Yさん26歳）は、中国語も話せるが、そのお父さん（50代）はクム語しか話せず中国語は話せないようであった。TVのニュースは中国語のため、クム語しか話さない人々にとっては内容をすべて理解することは難しい。しかし、映像から外の様々な情報を得ているようで、TVは娯楽として、また大事な情報源としても利用されていた。

冷蔵庫には、魚やSPAM、豚肉が保存されており、主に一度に消費できない大きい食物の保存として利用されていた。バイクは週に1回、外へ買い物に行くために利用していた。以前は、交通が不便であったため、町に出ることすら出来なかったが、今は道も整備され、バイクによって、行きたいときに自由に町へ出られるようになった。しかし、そんな状況になった今でもYさんは、「町は慣れない。用事があるときのみに出るだけで、自分たちの村が安心して生活でき、村を出たいとは思わない」と答えた。

写真2：冷蔵庫の中

考察

3つの聞き取り調査の事例を通してみると、まず標高差や民族などの違いから、村ごとに生業は異なり、そして、それぞれ独自の文化や暮らしがあることがわかる。しかし、近年では生業の変化から、生活の変化へ、それは、生業による現金収入の量によって生活変化の仕方も異なるが、大いに均一的な方向へ変化していることがいえよう。

まず、ゴム産業を生業とする傣族は、現金収入が他の村に比べて多い。この村の一人あたりの平均年収は約1万5000元であり、これは中国全土の農村部の平均収入に比べて約2倍から3倍[2]である。このことからも傣族のゴム産業はとても大きな現金収入源であることが分かる。

また山の麓にあるため、外部との接触が比較的容易で、近年の道路整備により、物の運搬も容易になっている。そのため、家も昔のように、自分たちの身の回りで用意出来る草や木でつくられた伝統的な家ではなく、外から運ばれてきた資材を用いた煉瓦造りやコンクリートの家が多くみられるようになった。そして、収入が生活の消費よりも上回っている現象のひとつとして、車などの贅沢品の購入がみられる。

またゴムの加工過程において化学薬品が使用され、その排水は未処理のまま流されていた。この現状について、まず彼らは化学薬品のことは勿論のこと、その環境に与える影響など何も知らない状況であったことが今回の調査で明らかになった。これは、化学薬品が科学技術や科学的知識を有しない人たちでも、容易にアクセス出来、その環境的リスクや人的リスクなどを知らないまま使用していることが可能ということである。この点は、今後自然環境を考える上で重要な要素になるのではないだろうか。

一方、この3つの村の中では外部の影響が比較的少ないと思われたのが、一番標高の高いラフ族の村である。この村の主な生業は茶栽培である。もともとは自給自足で生産していた茶であり、余剰は他の村との交易に用いられていた。現在は、主に現金収入源を目的とした商品作物としてつくられている。ゴム産業に比べると、その規模は小さいため、現金収入も傣族に比べると低い。しかし、この村でも生活は大きく変化している。交通状態は以前に比べてよくなったため、遠くから街の商品などが近くの市場まで運ばれるようになった。食べ物だけでなく、服や生活雑貨など様々な商品が持ち込まれ、近くの市場へ行けば、現

2　http://j.people.com.cn/94476/7622177.html
上記の記事によれば、『農村部の住民の現金所得は平均で5875元（約7万500円）』である。

金によって購入できるようになった。衣服が、伝統的な民族衣装を着た老人を除いて、ほとんどの人が洋服を着ていたことからもわかる。また、村の道端に捨てられたゴミからも様々な物品が入ってきていることがわかる。そこで、問題として考えられるのが、ゴミの処理問題である。本書で切川菜央も触れているように、プラスチックゴミや、以前のように土に埋めても処理できないゴミ（ゴムぞうりや靴）が道のあちらこちらで見られた。以前は、自然作物が多かったため、ゴミ処理は、土に埋めて自然に還す方法で対応できていた。しかし、外からの物資で、人工物が多くなった現在では、そのゴミ処理に対応が追い付いていない。このままであれば、交通状況はよりよくなると同時に、物品の流入もさらに多くなることが予想される。ゴミ処理について早期の対策を講じるべきだと考える。

また電気の普及や太陽光発電による温水システムも彼らが必死に求めて得たものであるのか、政府からの援助が先にあったのか、今回の調査では、その間の関係性について明らかにすることが出来なかった。外からの援助による介入の仕方をみることは、その地域にすむ人々と介入側が果たしてどこまで意思が共有できているのか、今後の納板保護区における自然保護の在り方について考えるための重要な一側面であると思う。

3つ目のクム人の村曼呂村では、国の保護政策のもと、住宅援助やバイオエネルギー、収入源として商品作物の栽培がみられた。人々は主な生業であるゴム生業だけでは、現金収入が十分ではないので、副収入源として薬草植物を栽培している。この村のほとんどの家庭でTVや冷蔵庫などの家電製品やバイクがみられた。聞き取りの中で、「現金収入が十分でない」と発言される一方で、どのように現金収入が利用されているのか疑問に残る点がいくつかある。例えば、冷蔵庫の必要性である。観察した家の冷蔵庫には、ほとんどの食べ物が入っていなかった。それは、毎日その日に食べる分量だけを用意し、調理し消費してしまう習慣だからである。このような人々にとって、冷蔵庫は必要性があるのだろうか。傣族の村納板でみられた自動車も、利用はほとんどされていない。これについても、同じことが言えるのではないだろうか。これらについては、現地での生活のようすについてのより深い観察と聞き取り調査が必要である。

おわりに

事例で取り上げた、3つの村それぞれにおいて、現在でも独自の生業、文化が多様に残っており、今でもそれは観察することができた。しかし、この近年の生業の均一性や現金収入の増加に伴い、物質的豊かさによる生活文化も変化し、均一性を増していることが分かる。外から入ってきた材料を用いた均一的な家屋をはじめ、電化製品、洋服やSPAMなどの缶詰食料がそうである。

また、変化に関していうと、外部からの影響による変化だけではなく、その影響を受けた人々が内面的にも変化しているということである。深谷（2004）は、西双版納の開発問題について、これは、単に「外来＝破壊的」「在来＝保守的」という図式で描くことは困難である（深谷 2004: 326）と示すように、この調査地においても同じことがいえるであろう。外部から様々な物資が入ってくる中で、村人の中には、今以上の収入を得て、将来的に子どもの高等教育に充てたいという希望や、車などの贅沢品の購入から、人によくみられたいという見栄のようすがみられる。このような村人自身の内面的変化を見れば、単純な「外来＝破壊的」「在来＝保守的」という二項対立では捉えられない。そのような環境で、自然保護について考える時、「開発か保護か」というような簡単な問題ではないことが分かるだろう。

自然を保護することと、その人たちが十分に暮らしていくことは、自然保護の持続可能性を検討する上で大変重要なことである。納板保護区の人々にとって、自然を保護することは、経済的負担を押し付けたものではなかったといえよう。今までの生活レベルを維持、あるいは向上した世帯が多く見られた。しかし、一方で、生活の変化をみると、それぞれの村の独自の生活形態や文化の多様性が急速に失われ、均一的な方向への変化が見られたことは事実である。これは、（鬼頭 1996）が多様な形の文化の展開を保証するのは、それを可能にする母体としての自然環境に他ならない（鬼頭 1996: 170）に則して言うとすれば、この地域の文化の多様性が急速に失われている現状は、自然環境を過度に損傷することなく保持していくための、非常に重要な課題として捉えることができよう。

これらを踏まえて、それぞれの村、民族における、彼らと自然とのかかわりについて深く記述していくとともに、自然保護とは

何か再考する必要がある。そのためには、伝統社会や今の近代文明社会といった単なる特定な価値観にそったものを切り取るのではなく、複雑で多様な自然と人間の営みについて深く研究していかなければならない。

参考文献

深尾葉子
2004　「ゴムが変えた盆地世界――雲南・西双版納の漢族移民とその周辺」『東南アジア研究』42巻3号、294-327頁。
鬼頭秀一
1996　『自然保護を問いなおす――環境倫理とネットワーク』筑摩書房。
手塚眞
2006　「雲南省の農村開発：自然資源、少数民族、およびNGOs」『東京経大学会誌』251号、125-144頁。
西谷大
2011　『多民族の住む谷間の民族誌　生業と市からみた環境利用と市場メカニズムの生起』角川学芸出版。